論文要旨

奈良時代の乾漆技法研究
― 聖林寺十一面観音菩薩立像の模刻制作を通じて ―

東京藝術大学大学院美術研究科
文化財保存学専攻保存修復彫刻領域（彫刻）
学籍番号 1320928 朱 若麟

乾漆とは、布や漆を用いて作る漆工技法のことであり、東アジア独自の技法である。古代中国では僧侶の遺体を保護する実用的機能を持っていたほか、仏像の制作にも用いられていた。造像技法としての乾漆技法は、７世紀に日本にもたらされたと見られ、奈良時代を中心に発展した。しかし、奈良時代の乾漆像の現存作例は少なく、そのほとんどが国宝や重要文化財に指定されている。一方で、中国唐代の現存作例は更に少なく、近代にそのすべてが海外に流出している。

本研究対象である国宝・聖林寺十一面観音菩薩立像（以下、聖林寺像）は奈良時代後期の木心乾漆像の傑作として知られており、もとは奈良県桜井市三輪山にある大神神社の神宮寺である大御輪寺（奈良時代中頃に創建）の本尊として祀られていた。聖林寺像は明治時代におこった廃仏毀釈を避けるため、大御輪寺と関わりの深かった聖林寺へ移されたとされている。

本研究は、奈良時代の乾漆像やその断片の科学分析を行い、実際の模刻制作を通した復元を行うことで、木心乾漆技法の詳細な制作工程を明らかにしようとするものである。具体的には以下のように展開していく。

第１章では、先学により明らかにされた聖林寺像についての情報を整理し、現時点における聖林寺像研究の問題点を明らかにする。

第２章では、科学調査を踏まえ、聖林寺像の構造と造像の計画性をより正確に読み解く。Ｘ線ＣＴ調査により、本像の木取りは面部中央に木芯が通っており、かつ大量の節が認められることから彫刻に不向きな材料であり、特異な内刳りや足枘はその影響を受けたものであると推定した。また、造像中に上半身を裸の状態でいったん完成させ、そこに衣を着せるという合理的な工程を踏んだ可能性を論じる。台座・光背に関しては、その復元に向けた考察を行い、小材に分割することによる作業分担、それらの強度を維持する工夫など、当時の造像における合理性と造形感覚を指摘した。また、聖林寺像の乾漆層に使われた材料には、同時代作例との多くの共通点が認められた。

第３章では、これまでの考察に基づき実際に模刻制作を行うことで、当時の制作技法と造像材料、制作工程の再現を試みた。心木の木取り、構造、乾漆造形技法の詳細について考察した。台座の最下段や、ごく一部のみが遺る光背を復元した。

本研究を通して、聖林寺像や同時代の作例には、素材の違いを生かす工夫や、効率的な作業分担、型押し技法の活用など、形式にとらわれない自由な造像意識を共通して見いだせることが分かり、それらが奈良時代の官営造仏所の仏工達が共有していたものであったと論じる。